

旧料亭信濃離れ 貸室として開放

築110年「菊の間」「桐の間」活用を

諏訪市大手



国登録有形文化財

数寄屋造りの名建築

諏訪市大手の有限会社信濃（小池志保子社長）は、国登録有形文化財（建造物）に選定された旧料亭信濃の離れ「菊の間」と「桐の間」を地域の会合や交流、趣味の場に利用してもらおうと、レンタル室として活用の門戸を開いた。大正時代初期の建築で約110年、多種多様な銘木、銘竹をふんだんに用い、「竹芸の精華」を冠する数寄屋造りの名建築。「さまざまな人に使ってもらい、匠の技の粋を集めた建物を守り続けたい」（同社、小松まやさん）と願いがこもる。

（日比野真由美）



竹の造作が見事な菊の間で香道を楽しむ受講者

庭園から望む趣深い菊の間と桐の間

蚕糸産業が盛んな時代に、製糸家・片倉組出身の小池熊右衛門が東京から大工30人を招いて3年がかりで建築した。天井、窓、床の間、床脇など随所に木、竹の曲がりや節を生かして凝った意匠の造作が施してある。1977年の閉業まで皇族をはじめ多くの賓客、得意客をもてなし、諏訪の華やかな隆盛の頃をどぞめる歴史的価値も高い。

料亭敷地は一部がビル、駐車場となったが、現有の建物は深い愛着を寄せて建設当時のままを守り続けている。「菊の間」は約8畳、「桐の間」は最大約16畳。これまで山野草や陶芸などの展示会や茶会に

貸してきたが、小池社長と小松さんは「建物は使われてこそ守られる」とさらに活用の道を模索。昨年には水場を簡易な厨房に改装して飲食が提供できる許可を取得し、用途を広げた。

定期的な利用も始めており、志野流香道の大平詩子さん、岡谷市を師に迎えて毎月1回、教室を開く。香道が学べる場は諏訪地方でも数少ないといい、市民に気軽な体験参加を呼び掛けている。

昨年暮れからは市内のホテルが、宿泊客のもてなしに利用している。信濃に残されている記録を基に、皇族に供した献立を提供する特別なツアーを企画し、外国人宿泊客の取り込みを狙うなど活用に広がりが出てきた。

小松さんは「丁寧な造りに居心地の良さを感じてもらえると思う。飲食を楽しむイベントや食事会、地域の会合など気軽に使ってもらえたら」と話している。問い合わせは小松さん（電話090・4181・7464）へ。